

## 令和5年度旭川未来会議2030 文化分野 第3回分野別会議 会議録

- 1 開催日時 令和5年8月31日(木) 午後7時から9時
- 2 開催場所 旭川市市民活動交流センターC o C o D e 2階会議室1  
(旭川市宮前1条3丁目3番30号)
- 3 出席者(参加者) ※敬称略, 五十音順  
あべ みちこ, 小沢 和雄, 柴田 望, 竹中 英泰, 野口 博人, 東方 鳳山
- 4 出席者(市側)  
(運営事務局)  
文化振興課 坂本課長, 松里文化ホール担当課長, 小川主査  
(統括事務局)  
広報広聴課 山本広聴係長
- 5 会議の公開・非公開 公開
- 6 傍聴者 なし
- 7 テーマ  
「未来像の実現に向けて解決すべき課題, 取組の方向性」
  - (1) 2030年の未来像に関する提言の検討
  - (2) 未来像の実現に向けて解決すべき課題, 取組の方向性
  - (3) その他報告書の内容確認

### 8 会議概要

事務局から欠席の参加者(1名)から事前に提出された意見を紹介した。

(欠席参加者)

- ・ これまでの会議を振り返っての所感として, 芸術はワクワクするものであって, ここに集まった皆さんは芸術文化, そしてこの旭川市を愛している人が集まっていると思う。未来会議というイベントに挑戦してみて, 皆さんのお話や議事録内容から強い気持ちが伝わり自分のまちにこんなにアートを愛する人々がいたのだと初めて知ることができ, 感激し, 旭川市のこれからの文化芸術の明るい展望が見えたような気がする。しかし, 会議が進むにつれて金銭面, 場所などの現実的な問題点に目が向いてしまい(実際に実現させたい強い思いがあるからこそだと思うが…), マイナスな方向, ネガティブな雰囲気になってしまっているのではないかと思う。現実的な問題について検討することは不可欠だが, 最初の明るい気持ちを取り戻しポジティブな方向に立ち返ることが今の文化分野の会議に必要なのではないかと思う。皆さんの熱意とどれ

だけ魅力的なイベントを構想することができるのか、それによって市にも動いていただけるのではないかという考えだ。旭山動物園の行動展示が実現した「14枚のスケッチ」のように、「実現可能なものを」という守りの姿勢からではなく、希望と夢に満ちたコラボイベントでもよいのではないかとも思う。一見実現不可能と思われるものでもやりたいという強い気持ちでまず動き出すためのパワーをこの他ジャンルの集まる未来会議という場で練り上げるべきではないかと考える。

- ・ 芸術マルシェの開催については、イベントを行うに当たって黒字にしたい。資金を調達するため、ブースを作って作家さんなどが集結し、販売イベントを行ったり、ワークショップへの参加資金を各ブースで集める必要があるかもしれない。
- ・ 普段アートに触れる機会がないから旭川市は芸術文化活動が盛んではないとアンケートに答える人がいるようなので、その層を狙って駅前付近、特に買物公園など人目に付く場所でイベントを行うのは最適であると考え。雨天時に食べマルシェではどのような対応をしているのだろうか。お祭りのようにテントを出せば多少の雨は防げる気もする。そのテントもデコレーションして各ブースで個性を発揮すればもっと素敵になりそう。駅前イオンの巨大モニターで広告を出すのも面白いのではないだろうか。プロジェクションマッピング、駅前広場をトータルインスタレーションのような一つの作品にするということも面白いのではないだろうか。
- ・ 秋に開催するのであれば、食べマルシェと前後させて開催することで食べマルシェの流れに乗ってお客さんに興味を持ってもらえるのではないかと思う。また、朝、昼、夜と時間帯を分けてジャンル別にワークショップを行うことによってターゲットとなる年齢層をピックアップできるのではないかと思う。以前、夜にカジノドライブの前での路上ライブを通りすがりの人が足を止めお酒などを飲みながら楽しんでいたという話を聞いて素敵だなと感じた。
- ・ まなびピアを発展させて次第に規模を広げていくという考えにも共感する。既存のイベントにのっとった方が入り口としては入りやすいのではないかと考える。広報的な意味でより多くの人に知ってもらうとなると屋内はやはり参加しにくい印象がある。また、芸術文化に親しむ習慣のない若者層を狙うという面では、あまり適さないのではないかなとも考える。

テーマに沿って、参加者による意見交換を行った。

(参加者)

事務局資料にあるとおり、現状として、文化芸術団体の会員の平均年齢が上がっているというところ、会員数が減少しているというところ、若い世代ほど文化芸術活動が盛んだと感じていないというところがあるのだと思う。なぜかという、情報が少ない、鑑賞機会が少ない、というところが原因となっていて、そうした課題があるからこそこうしていきたいという提案につなげることができれば良いと思った。

これらの課題を踏まえた取組のコンセプトとして、「だからこそ、こうしたいです」と、一文でぱっと分かると良いのだが、前回の会議で出された「暮らしに文化、デートも文化」と「文化は世界の共通言語」という原案は、個人的にはちょっとアバウトだと感じている。

「文化分野として2030年に向けて、こうしたいです」ともう少し具体的に伝わるキャッチコピーを打ち出したい。

(参加者)

少しずれるかもしれないが、今日学校での授業があって、フリースクールなので、生徒一人しかいなかったのだが、その子が文化会館で開催されるネット世界のアイドル4人組「浦島坂田船」のコンサートを観に行くということだった。

私には二次元アイドルのコンサートというものがあまりイメージできないのだが、彼女たちにとっては憧れの存在で、「本当にこんな人たちが旭川に来るんだ」と言ってワクワクしていた。私も彼女のキラキラした姿を見て、すごくうれしかった。二次元なのでネットでも見られるのだが、考えてみるとコロナ禍でこういう間近で観る機会が失われているのもあって、イベント開催に対する若者の期待値も高まっているのだと思う。この期待に応えるために、多くのミュージシャンが、旭川に来たいと思える仕組みづくりがあれば良いと思う。旭川に来たら、こんな良いことがあるとか、芸術の関係の人も、すごい部屋に泊まるとか、おいしい朝ごはんもあるとか、そのようにアーティストにPRして呼べたら良い。

(参加者)

そういうものにしっかりと触れる機会を増やしたいと思う。せっかく立派なホールもあるので。

(参加者)

若者がいろいろなジャンルの文化に触れる機会が少ないという課題については、学校と連携するのが効果的だと思う。若い人たちにとっては、学校が一番身近である。以前、放課後児童クラブに行って囲碁を教えていたが、いろいろなジャンルと一緒に取り組んで、多様な文化に親しんでもらう機会をつくれたら良かったのではないかとも思う。

(参加者)

学校に行くというのは、すごく賛成だ。

演劇部だけじゃなくて、学校でお芝居をやってみようというワークショップをほかの街でやっていると聞いたことがある。

課題のところで一つ確認だが、ここ5年ぐらいで、新しくできた文化団体はどれぐらいあるのか。そこも文化の発展というところで確認したいと思う。鑑賞機会が少ないのもそうだが、文化団体がどれぐらいできたのか、減ったのかも聞きたかった。

(事務局)

文化団体がどれぐらいあるのか、市で全体を把握できているわけではない。文化団体は定義が曖昧なところがあるので、市の調査では、文化イベントをするにあたり、後援名義の申請があった団体など、何らかの関わりがあった団体を調査対象にしている。

公民館登録している団体ということであれば、ここ数年で新しく登録された団体がどれぐらいあったのか、公民館を必要とする団体に寄ってしまいバイアスがかかってしまうが、傾向は捉えられるかもしれないので別途お伝えする。

(参加者)

全体像がいまいち掴みかねるところが、情報発信の課題なのかもしれない。

(参加者)

扇松園という旅館の廊下の壁に、今年1月からずっと、私の作品を飾ってある。

お金がかからない展示場所をかき集めて、ネットかマップのようなものの上に上げたらいいのではないだろうか。

(参加者)

若い人に興味を持ってもらえていないという原因について、以前に詩がすごくはやった時代があったのだが、今はサブカルチャー、ゲーム、漫画とか面白いものがいっぱいあって、そんなことをしなくても良いということもあると思う。

また、我々北海道の詩の文化で言うと、若い人の良いところを育てるようなことをあまりやってこなかったというのもある。どんな文化もそうだが、人の悪いところを見つけて、どうのこうのと言うのは結構簡単なことで、良いところを見つけて育てる、ワクワクを生かすというのは苦手なので、いろいろなジャンルの良いところにスポットが当たるような芸術マルシェでなくては駄目だと思う。

(参加者)

詩の発表の際に、朗読とかギターなどの楽器とのコラボで発表するという事はやっているか。

(参加者)

10月7日に、詩人の吉増剛造さんが井上靖記念館へ来るのだが、吉増さんの詩のパフォーマンスは、音や映像も使ったもっと広い意味での芸術と言える。

(参加者)

私は小さい頃、詩人の寺山修司さんが好きだったのだが、画家の宇野亜喜良さんと一緒に出版した絵本をきっかけに好きになった。前回話したが、「家具センターで囲碁」でも良いが、普通は交わらないものの組み合わせというのが芸術マルシェのポイントだと思う。

(参加者)

旭川で活躍した詩人の小熊秀雄は、絵も書いていて、日本で初めてのSF漫画を執筆したという経歴もある。安部公房も日本で初めてシンセサイザーで作曲したりとか、いろいろなジャンルを組み合わせで活動していた。

(参加者)

芸術マルシェということだが、一回限りのイベントになってしまうかもしれない。そうならないように、年間を通して、このジャンルとこのジャンルの組み合わせのイベントをこの時期に実施し、次の時期にはこのジャンルとこのジャンルで、といった年間のプログラムを作れば良いと思う。ただ、これを誰が企画するかという問題があるので、そこは市でやるべきだと思う。

(参加者)

市でやるということではなく、イベントをきっかけに参加者同士で自然発生的に実施していても良いと思う。

(参加者)

旭川でも昨年から、喫茶店を使って写真と俳句の組み合わせで展示会をやっていて、今後写真

と川柳の組み合わせで実施する計画もある。三番館に知新小学校の児童の川柳が飾られているが、これはいつ見ても地域の素晴らしい文化芸術だと感じる。

(参加者)

最近、書道と音楽と踊りを組み合わせた書道パフォーマンスが実施されている。20年以上前にはなかった。

(参加者)

今年、旭山動物園主催で「動物墨画パフォーマンス甲子園」が開催されたが、私が以前に勤めていた会社が、大きくて、踏まれても強く、墨の吸収の良い特製の紙を作って寄贈したそうだ。

(参加者)

買物公園でもパフォーマンスがあったが、その時、風が紙が飛ぶのをみんなで押さえて、やっていた。感動した。

(参加者)

買物公園を漫画ストリートにして、みんなが参加して描く、そういうのは若い人は大好きな企画ではないだろうか。

(参加者)

以前、子供たちと一緒に、路面にチョークで描いた。「旭山動物園の14枚のスケッチ」のように、15年ぐらい前に、買物公園の何枚かの絵を描いた。買物公園がカフェテラスのようになってみんなが飲んだり食ったりできたらいいなとか、映画館のように映像が映ったらいいなとか、いっぱい描いた覚えがある。少しずつ叶っている気がする。絵にするとイメージが共有されて実現に向かうところがあるかもしれない。

(参加者)

買物公園は、芸術マルシェでも良いし、いろいろなジャンルのコラボレーションでも良いし、あるいはワークショップをするのにも良い場所だと思う。

(事務局)

文化ではないが、市の中心部で、お店の方が講師になって、例えば、カメラ屋さんであれば「デジカメでの上手な写真の撮り方」だとか、時計屋さんであれば「ブレスレット作り」だとか、チーズ屋さんとコーヒー屋さんがコラボしたりだとか、お店に足を運んでもらうきっかけづくりということで、ミニ講座を実施する「得する街のゼミナール」という企画がある。今年で15回目になると思うが、続けていくことで、一定の効果は上がってきているのかなと思う。

(参加者)

とにかく、一つ触れてもらうことで、その後どう続けてもらうかにつながると思う。2030年という区切りをつけるなら、まずは触れてもらうということが軸になると思う。

(参加者)

写真のことで恐縮だが、ギャラリー北の森で開催している「初めての写真展」というのを見てきた。初めての写真展なので、技術だとかは関係なく、「私はこう思ったよ」ということを、そこ

で発表している。最初はそうだったかもしれないけれど、次の2回目は、写真の考え方や見る目がきつと変わっていくのではないかと思う。そういうきっかけ作り、「触れてもらう」ということはすごく大事なことではないだろうか。

(事務局)

一旦話を戻すと、課題を捉えたテーマにしなければならないということで、会員が減っている、特に若い人の意識がなかなか向いていないことに対してアプローチしたいというのがあり、それに向けてどうしたらいいかという部分で、間口を広げていくということだと思う。この課題感に向けては、芸術マルシェをやっていくというアプローチがあり、それを大きく概括する表現として、「暮らしに文化」という話があった。

若い人に知ってほしい、触れる機会を作りたい、だから日常にも文化があるという場所を作る。そのきっかけ作りとして、気軽に体験できる場を作る。こういう流れでいけば、このようなプレゼンの構成は、筋が通っているのではないかと思う。

そんな中で、先ほどお話があったのが、どんな団体が新しくできているのかということだった。イメージとしては、新しいカルチャー的な団体が出てきているということであれば、そういう団体にブースに入ってもらって、若者の目を引くような流れに芸術マルシェを持っていくというつながりで、そこを確認するためのデータが必要という理解で良いだろうか。若い人に知ってもらうために、新興のジャンルはどんなところなのかを確認した上で、芸術マルシェの内容を考えていく。その材料とし、新しくできた団体を確認するというところだろうか。

(参加者)

そういう方向に持っていければ最高だと思う。もし、そういう団体が無いのであれば、間口を広げた後の課題になるのかなと思う。新しい団体ができてないのであれば、できづらい環境だと思うので、間口を広げても、次の二歩目が出づらいと思う。どちらの結果になっても面白く、課題に盛り込めると思う。

(事務局)

提言をもっと具体的にしたら良いという話があったので、そこに立ち返って、全体のコンセプトから話し合うのはどうか。

(参加者)

外国人がだいぶ増えている。外国の人がいること自体が文化の一つだし、存在そのものが何かを発信しているのではないだろうか。

(事務局)

それはまさに、もう一つの提案の「文化は世界の共通言語」に絡んでくるイメージかなと思う。確かにインバウンドが今、戻ってきているので、良いタイミングでもある。芸術マルシェの企画のコンセプトとして、外国の方を取り込んでいくというものもあるのかもしれない。

(参加者)

芸術マルシェの開催は、一つ目の「暮らしに文化、デートも文化」にもつながるのかなと思う。外国の方が居るといっても暮らしである。外国の方がたくさん居る暮らしも、文化と捉えること

もできるし、暮らしに当然あるものに文化になってほしい、レベルが下がってほしいという意味にもなる。今のつなぎ方で考えるなら「暮らしに文化、デートも文化」で良いのかなと思った。

(参加者)

前回の会議に出られなかったのだが、資料は見せてもらった。「暮らしに文化、デートも文化」というコンセプトはすごく良いなと思った。説明文にもあるが、文化が敷居の高いものになっている。でも、都会に比べるとかなり少ないとは思いますが、ちょっと蓋を開けてみれば、旭川でも意外とすぐそばに、実は気付かれていないものがたくさんある。だから、気軽に触れ合える機会があれば、という提案に合っているのでは、とても良いと思う。

最終的なゴールが芸術マルシェであるとすれば、そこからまた、スタートになると思うのだが、そこに行く着くまでのステップは何かと考えた時に、「実は芸術はもっと身近にあるんだ」ということを知らせたら良いと思う。例えば、市内にどんなギャラリーがあるのか、どんなイベントが定期的に行われているのか、そういったアートマップ的なものがあると良い。当然外国の方にも触れていただけて、自分の興味のあるアートがどこでやっているか分かるようなものがあればと思う。

私も、書道の関係で東京に行くことがあるが、いろいろな文化芸術に触れたいと思い探すと、様々なマップが出ていて、身近に手に入れることができる。そのような情報発信を芸術マルシェの前までに進めていければ「文化芸術はすごく身近なんだ」と感じて、「じゃあ、行ってみよう」と思ってもらえるので、2030年の芸術マルシェに向けてのステップとしては、非常に大事な提案になるのかなと思う。

(参加者)

旭川にある文化施設、芸術作品の展示物など、宝ものがいっぱいあるのに、あまり知られていない。文学資料館や三浦綾子記念館などもあるが、だんだん忘れられていってしまう既存の文化芸術にも触れてもらう努力をしたら良いと思う。

(参加者)

提案としては一つ目の「暮らしに文化、デートも文化」で進めていく。そのために芸術マルシェまでの過程をどうするかだが、「芸術マルシェを開催して、文化芸術への関心を高め、文化芸術活動の促進を図る」という順序は、逆ではないかと思う。取組の方向性として出された「情報発信の強化」「分かりやすく伝える工夫」「アーティストの交流促進」などを進めながら、芸術マルシェの準備をした方が良いと思った。いきなり芸術マルシェを開催しても「何それ？」となってしまうと思う。

取組の方向性として、情報発信と分かりやすく伝える工夫という話が出ていたが、逆に、今はなぜ分かりづらいのだろうか。

(事務局)

情報は発信されていると思う。ただ、それを見て、行きたくなるか、参加したくなるかが大事だと思う。そういう気持ちにならないと、興味がなければ「ただやってるな」で終わってしまう。そこにあと一歩踏み込んだ情報発信が必要だと思う。

(参加者)

各戸に配布される「広報誌あさひばし」のなかに、芸術マルシェの小コーナーを作って、毎月掲載するのはどうだろうか。目に触れる機会を増やせると思う。

(参加者)

情報発信はたくさんされていると思う。しかし、若者がそれを知らないという現状がある。情報発信しているけれども、伝わっていない。郵便受けに「ライナー・機関紙お断り」と張っていて、そもそもライナーが入っていないところもあるし、新聞を取っている学生も減っている。

逆に、新聞やライナーを読んでいる方々は、「文化芸術活動が盛んな街か」のアンケートに丸を付けていると思う。既に伝わっている人には伝わっているというところが難しいところだ。

(事務局)

その部分については、キックオフミーティングの時に、SNSで発信する時にSNSの選び方としてInstagramやティックトックが良いと意見があった。

高齢化が進んでいる団体にとって、ツールとしてこれをどのように活用するかが難しいところではある。

(参加者)

旭川には大学が三つあるのに、大学生が運動はいっぱいしているが、文化活動は全然していない。

若者に届けるには、若者を使うのが一番楽だと思う。友達がやっているなら行って見て、もっと大人の方とコラボして、そっちにも興味を持って、という流れで広がるかなと思う。

例えば、学校に行ってワークショップをして、プラス、宣伝したら良いのではないだろうか。若い人に届けなければいけないので、そこに行ってワークショップをした上で、講演や展覧会のお知らせをするというような、つながりを持つための入口をつくるということだ。

(参加者)

10月に文化会館展示室で旭川写真連盟の写真展を開催する。写真団体が減ったので、展示スペースが空くので、今年は空いたスペースを高校生に開放して、高文連上川支部写真展の入賞作品を借りてきて展示する。高齢化が進む私たち写真連盟の人も、高校生がどういう写真を撮っているのか見たことがない。高校生も父兄も見に来るので、写真に興味を持ってもらうきっかけ作り、ちょっと触れてもらう良い機会になるよう準備している。高齢者も高校生の写真に触れ、写真をとおして話ができれば、良い刺激をもらう場になると思う。

(参加者)

学生を活動に巻き込めば良いかもしれない。

(事務局)

接点を持つ、情報を伝える機会という方法論をどうするかという議論が進んでいるが、媒体の選択もそうだが、そもそも中身が受け入れられるのかどうかということもあると思う。例えば「書道」というと難しいイメージがある中で、たとえ情報が届いたとしても、それを楽しく体験できそうか、楽しく感じられそうかという発信する情報の中身の部分。

(参加者)

我々が芸術活動をして、自分が主役になるステージがあるわけだが、ほかの人を主役にするということをして、初めて成長できると感じる。ほかの表現者が主役で、その人たちを真剣に見て、感想を述べたり良いところを言うということがものすごく自分たちの成長につながる。そこを根本的なものと考えて、情報発信の手法であるとか、お互いの表現の場を作っていくことが大事なのではないだろうか。

伝える情報の中身について考えると、例えばイベント開催の際に、いつどこでやるという基本情報だけではなく、団体の活動やイベント開催に至った理由や背景、イベント参加の魅力などを詳細に、かつ絵や画像や動画を使用しながら分かりやすく印象づけることが必要なのかと思う。

(参加者)

情報発信についてずっと考えている。どうやって魅力のある情報を発信するかというのが課題だと思う。それを誰がやるのかというと、我々芸術家がやるべきことだと思う。「分かりやすく伝える工夫」も我々分かっている人がやるべきだ。ただ「施設の整備」というのは市としての取組だと思う。

魅力のある情報発信については、新聞記事でスペース的に大きく取り上げてもらって、実際に写真を入れてもらうとか、そこはほかの団体に努力してもらうことかと思う。自分たちは何ができるのか、今までやってきたことでは足りないからこういう現状なので、これから努力する部分もあるのかなと思う。「情報発信の強化」ではなくて、「分かりやすく伝える工夫」が大事だと思う。

(参加者)

F Mリバーのラジオで情報発信するというのはどうだろうか。「情報発信できるコーナーを一枠作りませんか」という話ができれば良いと思う。

(参加者)

以前、総合的な学習の時間で小学校5年生に囲碁を教えた時、最終回に日本棋院のプロ棋士を連れていった。学校教育の中の活動であれば、こちらから申請すれば、プロを派遣してもらえる。このようなことは、いろいろなジャンルでもあると思う。

(参加者)

直接足で出向いて行くと、効果があるかもしれない。出向いて行って、教えて、熱意を伝える。面白さや楽しさを、好きな人がしっかりと熱意を持って話すのが一番分かると思う。

(事務局)

以前、文化会館で小学生を対象に、舞台設備などの見学や操作体験ができる「夏休み！バックステージツアー」があった。広報誌にもお知らせは載せているのだが、最低限の情報しか載っていない。運よくライナーさんに取材をしていただいて、その記事中にスモークを焚いてる写真や細かい情報も載せてもらった。結果として1時間ちょっとで定員が埋まったが、半分以上がライナーを見た方だった。うまく伝わるような情報発信の仕方が大事なのかなと思った。

(参加者)

バックステージで働くということもすごく勉強になると思う。例えば、芸術マルシェのような大きなイベントで、そのスタッフとして大学生が働くということがあったとして、フィールドワークみたいになって、いろいろな企業さんが関わってきたりして、極めつけは、憧れの有名なアーティストのバックステージの仕事ができたら幸せだと思う。そういうこともできると思う。

(参加者)

芸術マルシェはどのようにやっていくのか具体的に考えるべきではないか。  
どの時期にどの箇所でやるか、どのような体制で実施するのかという部分。

(事務局)

まなびピアをベースにして参加者が主体となり、駅前、買物公園を中心に人目につく屋外開催を企画するというのがこれまで議論してきたところだと思う。

(参加者)

まなびピアだと冬開催になるので難しいのではないかな。

(参加者)

目的としては、敷居を下げて、まず触れてもらうということだったかと思う。

(参加者)

そのために来るのではなく、偶然通った人を巻き込みたい。

(参加者)

フードテラス、旭川はれて、JR旭川駅構内もあり、中心部は適した場所だと思う。

(事務局)

駅イオンの巨大モニター、プロジェクションマッピング、駅前広場で空間全体を使っていくトータルインスタレーションといった提案もあった。何をやっているのかなという部分で人目を惹きやすく、芸術に興味がなくてもちょっと行ってみようかなということになるのかもしれない。

(参加者)

プロジェクションマッピングだと金銭的な負担が大きくなり現実的でないのではないかな。

(事務局)

夢物語かもしれないが、まずはアイデアを出すことを重視するのはどうか。実施していく中で賛同者が現れ、少しずつ実現していくという展開も考えられると思う。

(参加者)

芸術マルシェはゴールでありスタートだと思う。2030年と考えると、ひとまず芸術マルシェがゴールになりそうなので、夢物語かもしれないが、これをいかに現実味のあるものにしていくかが今回の提案のポイントなのではないかと思う。

(参加者)

芸術マルシェは完成した作品を置くのではなく、できあがる過程も含めて見ることができ、作者と触れ合える場所になれば良いのではないかと思う。動物園の行動展示みたいな発想だ。

(参加者)

最初は小規模でも良いと思う。「取りあえずやろう」ということで、まずは「発表会をします」でも良いのかなと思う。同時期にいろいろな分野が、例えば、「3連休にいろいろなところで、いろいろなことをします」というスタートでも良いのかなと思っている。それがうまく回れば、期間を2週間に延ばして、「この日とこの日はワークショップをします」ということも、ゆくゆくはできるのではないだろうか。続けることができればということだ。

最初から、いきなり買物公園でやろうとすると、どうやったらいいか分からないので、最初は市内各地を借りて、それぞれで「同時にやっています」というのをやって、ゆくゆくは買物公園とかで、何とか形を見つけてやっていけたら、素敵だなと思う。

(参加者)

例えば、市としていつからいつまでの1週間は「旭川市芸術週間」で、この期間はこんな展覧会、こんなことやっているという情報を発信してもらって、「ちょっと足を運んでみませんか」からスタートするのも良さそう。

(参加者)

芸術マルシェの前に「市民」を付けたらどうかなと思う。ちょっとダサいかもしれないが、「市民芸術マルシェ」にすると、私も参加してもいいのかなと感じていただけるのではないだろうか。

(参加者)

まず2030年にどんな形であろうと、第1回目のマルシェを実施するということが目標になってくると思う。

以上